

遠山桜天保日記

煙の人

〈出典：『演芸画報』大正9年5月号〉

生田角太夫後に按摩電庵	市川 猿之助
清元延若後に久喜万字若紫	市川 松 蔦
芳村金四郎後に遠山左衛門尉	市川 寿美蔵
尾花屋小三郎後に祐天小僧小吉	市川 寿美蔵
遠山弟清之丞	市川 薙 升
遠山妻おけい	坂東 秀 調
角太夫妻おもと	市川 紅 若
佐島天学後に藤村浦太	坂東 寿三郎
須の崎政五郎	市川 段四郎

この狂言は竹柴其水氏の作で明治四十四年の十二月、今の左団次がやはりこの明治座で演じた事がある。書下しは明治二十六年の十一月、先代の左団次が遠山左衛門と角太夫、権十郎の天学、今の小団次の祐天、故人升若のおもと、先代荒次郎の番頭、今の段四郎がやはり政五郎、延若は今の歌右衛門、当時福助の全盛時代で、断食堂の不動明王は九代目団十郎が勤めたものであった。

□序幕花川戸稽古所の場合

賑やかなお囃子で幕が開くと、左喜之助の大工、栄升の経師屋、長十郎の屋根屋、三人のお弟子が稽古台の前に鼻面を揃え、かつみの小正が三味線を抱えて『浮た鷗』の稽古をして居る。上手長火鉢の前の処では薙蔦のおえんが稽古台を控えて、荒次郎の番頭清六が、あの長い頓狂な顔を振って「色で逢うのも昨日今日……」と胴間声を揚げて居る。

三人の方で「浮たかもめの一イニウ三イ四ウ五ツ六ウ七八ア……」などと巫山戯る。番頭は奇声を放って「堅い屋敷の御奉公——」とやらかして騒々しい。

やがて師匠の延若の留守に、二人が代稽古をつけて居る筋が渡って、番頭と三人連と胴間声と調子ッ外れという喧嘩が始まる。所へ向うから寿三郎の清蔵、(須崎の政五郎の弟——遊人)が出て来て中へはいり、声の喧嘩とは粋で好いが、よくよく聞けば色気のない事と笑いになって、清蔵は奥へ行った。

下手隣りの二階の心で、伊予簾を捲上げての、清元栄寿太夫の出語りで『其囀立仇浪』の上りになる。

「雨の降る夜は一しお床し、さえては月に猶床し、お俊は一人湯がえりに、浴衣を一寸抱え帯——」

松蔦の延若が女中を連れて向うから洗い髪の湯がえり、あとから紅若の母親おもとが呼びかけながら出て来た。「おや阿母さん」と三人連れ立って家へはいった。

番頭はじめ一同居住居を直して迎える。「懽ぞお待遠でございましたろう。少し御免下さいまし」と延若は鏡台を出して水化粧にかかり、浴衣を重ねた平常着を脱ぎ、燃えるような緋縮緬の長襦袢を下に派手な豎縞の着付と着替える。番頭はよだれを流して見とれる。傍から袖を引かれて隣を向き「ようようえらいと申升」などとテレ隠しを言う。

向うから寿美蔵の尾花屋小三郎が縞糸織の羽織着流しで雪踏を穿いて出て来た。「御免よ」とはいるので、番頭は慌てて奥へ逃げ込んだ。三人の経師屋連も悪い奴が来たという心で顔を見合わせた。化粧を了った延若は「若旦那、恰ど今帰った所……」といそいそする。代稽古の二人の女が帰りかかるので、三人の経師屋連も妬け気味になって帰って了った。延若が茶を注いで出す手と小三郎の手がぶつかって茶を霽したので、羽織が濡れてハッと二人は色模様の見えに極ると、

「変わる心に伝兵衛は、せき立つ胸を押ししずめ……」

と清元の上り、この体を見た母親はテレて立とうとする所へ、奥から清蔵が出て来て火鉢の向うへ坐った。清蔵は恰ど逢いたい所だった——と、兄政五郎の処へお宅からお人があって、延若との中を切って呉れとのお頼み——と二人の縁切話を持出した。

二人はちょっと顔を見合わせて凝と俯向く。奥から番頭が出て、
「所詮御夫婦になられぬ事は三世相に委しく出て居る」

と生真面目に別れ話に賛成する。母親も「五歳の年に親分へ、養女にお願い申した其大恩のある親分の御言葉」とこれも共々意見する。

「すっぱりと切れましょう」

と思いついた小三郎の言葉に「ええッ」と驚く延若。

「これを兎やかかいう時は、両親のみか政五郎殿、又おもと殿まで迷惑ゆえ……」

「そういう事なら妾も共々、得心せねばなりませぬか」

と、男女は更らに打沈んだ。清蔵は念を押して「そう決ったら面倒でも一札書いて下さい」と硯箱と紙とを出した。

「世の中は何に譬えん飛鳥川、きのうの淵は今日の瀬と……」

延若が拗ねて硯箱を取上げるを、番頭が引たくって中へ割込む。小三郎は書損ねた風の紙片を丸めて延若の前へ捨てたのを拾って袂へ入れる。一札を受取った清蔵は「悪いようにはしませんから、決して心得違いをせぬように」と、母親も延若に意見する。二人は涙、番頭一人笑壺に入って「若旦那にもお嫁が来ようから師匠の方も、こう堅気な番頭のような好い口があったら、私がお世話をしましょう」などとじりじり傍へ寄ると「えッ、も、しらぬわいの」と自暴にいう。

団子の小僧が迎えに来たので、力なく立上った小三郎「そんならこれ限り……」延若は羽織を後ろから着せかけて凝となる。番頭と小僧が隔てて「あ、もし」と柝がはいて時の鐘で幕。直ぐ引返すと、

口同 隅田川三囲堤の場

四尺位の堤の高さ、真中に石段、渡船場の心で、前一面の浪布、乱杭ところどころ。満開の桜樹、三囲の鳥居が低く上部だけ見える。上手寄り出茶屋の葭簾。浮いた合方で直ぐ上手から米左衛門の尾花屋の下女おいせ。大きな葛籠を連尺で背負って片肌ぬぎ片褌端折り、後から荒次郎の番頭が追かけて来た。

おいせは番頭の胸倉をとって、「人をだまして裸にして、延若の処へばっかり」とこづき廻す。番頭は「そう何もかも持て行かれて堪るものか……」といろいろ甘い事を言うので、おいせは直ぐとろりとなり、これから二人は喜劇道行という段取で、手を引き合って下手へはいる。

合方が替ると、月が出る。上手から寿美蔵の小三郎、悄然と小僧を先きへ出て来た。堤の真中でいろいろ言を構えて小僧を使いをやつて了った。ほッとなって前後を見廻して居ると、同じく上手から松蔦の延若が手拭を吹流しに冠って忍び出る。二人は突当って顔見合せ「おお若旦那！」「これッ」と本釣の音。船の端唄がかすかに聞える。

「紫の結び目かたき緑の糸、解けぬも色の深みどり——」

「よく反古にせず来てくれた」と最前出遇いの場所を書いて渡したその紙片を出して色模様。

「待つに來ぬ夜は筆の先、恨み重ねし命毛も——」

と二人は手を取り合って泣いた。

「夜とはいえど花の頃、人目堤に障りの無い中」

「無常を告る浅草の、鐘もろともに消えて行く」

「散りて流れに浮む身は」

「不孝を人に笑われるれど」

「思い切られぬ互いの悪縁」

「そんならお若」

「ほんに嬉しゅうござんすわいなア」

二人は彼の石段を下りて危く躓き抱き合つてわッと泣く。やがて小石を袂に延若は緋の腰帯を解いて二人の足を結び、飛込もうとして気遅れの中、帯はほどけて堤へ流れる。

二人は想い切つて水音高く飛込んだ。舞台には月が澄み渡った。

下手から寿三郎の浄雲寺の天学、濃い茶の法眼羽織、着流しで高い駒下駄、頭巾を載せて居る。

「今夜は所詮出られぬと思つて居たら、駒形からお通夜を頼みに来たので……」

と、代りを頼んでこれから向うへ、此の手紙の様子では嘸ぞ待て居るであろうと天地紅の文を出して月明りに透して見る。その後から猿之助の生田角太夫、宗十郎頭巾に紋付羽織着流し、大小雪駄穿きて窺い出る天学が手紙を懐ろに捻込んで竹屋の渡船を呼んで居る後に立って突然に「御出家、向越で何れへござるな」「エエッ」と驚く。

「徒然の余り夜桜を、月をよすがに隅田堤、臍に霞む花の下、通夜は替りを遣わして、向

うへ越すと言わるるは、申さずとも先は吉原、御出家こりやお楽しみな事でござるな」と乙にいう。天学はおどおどして言訳をすると「あのここの横着ものめがッ」と一喝を食わして角太夫は、「予て目串をつけて来たのだ、文と一緒に所持金残らずここへ出し、其身の罪を白状致せ」と屹という。天学は其筋のものと思って震え上ると、角太夫は「なァにおらァ盗人だ」と世話調子に怒鳴りつけた。天学は愈よ驚いて「泥棒々々——」と逃げ廻るを、襟髪攔んで引戻す。月が隠れる。闇探りになって突かれて天学は堤から石段を落ちて杭へ脾腹を強く打てウーンと仆れる。角太夫がそれを見込んだ時、バラバラッと手先が二三人。緋総の十手を揮って組付いた。ちょっと立廻る中、ドンと鉄砲の音、手先の怯む隙に角太夫は上手出茶屋の蔭へ隠れた。

又た月が出た。手先は遊八と登喜助と左八助である。悶絶した天学を認めて呼び生けた。懐中から以前の文を引出すとそこに、女の黒塗の下駄と緋の扱帯が見えた。

「追落しをしやアがったな」

と手先は驚き呆れる天学を縛り上げて引立て下手へはいる。コーンと鐘が鳴って、角太夫が再び現われた。手に短銃を持って、凝っと向うを見送って、
「馬鹿めッ」

と刀をグッと落とし差にする。波の音を冠せて幕。

□二幕目 成田山断食堂の場

(段四郎歌舞伎座とのカケ持の都合で台本三幕目の一半を茲で見せた)

凄い鳴物で幕が開くと、舞台見物席とも真暗で、正面左右折廻しの張物の石垣、一面注連を張廻して、稍や下手寄りに経机。経巻の上へ寿美蔵の祐天、白の着付で仮寝をして居る。上手隅に三つ股の燈台が瞬いて居る。

「捨身の行に疲れ果て、眠るともなく祐天は、更に正体なかりしが——」

と上るりに、下座には音楽が聞える。

「明王微妙の梵声にて——」

と仄明くなり、奥から三升の不動明王が押出された。

「いかに祐天よッく承れ。汝一心に我を念じ、心の曇を磨くといえど、元より汝の家に障りあって、其罪障深くして、汝の一身に及びたる事、逆も此世において、いかに諸経を学ぶとも叶うまじ。然れども斯くまで我に誓うてその道を貫かんとする志こそ殊勝なれ。依て五臓の鈍血を吐かせ、新たに非凡の知識を授けんが、われ携えし劍の外、今一口の短劍あり、何れを呑むや返答せよ」

祐天はハッと起上った。よろよろッと手を突いた。

「元より命は捧げし祐天。願いが成就いたしますか、又は一命捨てまするか、二つに一つの願い故、長い方を呑みまする」

「さらば真言唱えよや」

よろめく祐天、不動の膝の辺りに取つくと、不動は右手の劍をあげた。祐天は合掌する。画面の見得になる。「尊かりける——」と唄の上げで浅黄幕を振落す。直ぐ引返す。

□同 護摩木山の場

十日ほどの月、杉の木立、山おろしで開く。真中の木蔭に寝て居る男がある。下手奥から米左衛門の火の廻り、新勝寺の提灯を提げて出て来た。うなされる声を聞つけて気味悪げに呼起した。その男は寿美蔵の祐天小僧小吉であった。前幕に心中をした尾花屋小三郎の後身である。五分月代の藍がかかった袷に三尺。夜番が早く構え外へ出ると叱るので昨夕夜明してつい寝込んだのだから怪しい者では無いと詫る。夜番は口小言で行ってしまつた。「昨夜の疲れにとろとろと、眠った中に剣を呑んだ夢を見て、起されてから又た剣突。こいつア飛んだお茶番だが、おれの緋名を祐天を夢に見るとは何かの因縁。金が身体にはいるたア、こいつは運が直るかも知れねえ」

と独言で立上った。人音がするので木蔭へ隠れると、上下から猿之助の角太夫と寿三郎の天学が跣足尻からげ、菰を頭から冠って前後を見廻しながら出た。菰を刎ねて二人は顔を見合つて點頭き合った。祐天が真中へ出て、

「おめえ達は何者だッ」

「そういう手前は！」

と二人はギョッとしながら三人キツ見得になった。

「おらア此処らの破落者だ」「エエッ」と驚く二人を押えて「と行った処がまだ駈出し、気の張るような者じゃアねえが、此の夜よ中、護摩木山へうろつくお前ら、どうせ真面目な人間とも思はれねえ」とニヤリと笑って言った。角太夫は「堅気で無えなら種を明すが、実はおら達は牢破りだ」「ええッ」と今度は祐天が驚いた。角太夫は「立咄しも出来ねえから……」と三人捨石に腰を下した。

「佐倉の牢に打込まれ、碌に日の目も見ねえで居たが、漸う外へ拔出して、此処まで来たんだ。真言秘密の法よりも堅く秘したる身の素性を、名乗れば生田角太夫という金箔付の盗人だ。

前は寺の役僧で、女犯の罪は免れても、身に振かかる災難は、のがれぬ悪魔の向島、土手で付られての後に、金が敵でくらい込み、佐倉の牢へ引かれて来た、佐島天学というものだ」

と二人は始めて名乗り合った。此の名乗りで角太夫と天学は互に前幕向島の事を知り合つて、天学は角太夫の為めに此の体となったと知った。併し遺恨を含む心をじっと押し包んだ。祐天が言い出して、これから三人が兄弟分になろうというのでどっかで盃をしようと立上った。所へ、以前の夜廻りが戻って来た。「又た二人増えやがったな」というと「ヤツつけ仕まえ」と角太夫は夜番の六尺棒を撈取て殴りつける、ウーンと夜番は気を失った。

上手から旅姿の須崎の政五郎が小田原提灯を下げて出て来た。段四郎の役だが、誰れかの吹替えである。角太夫が突然提灯を叩き落す。月はかくれて、四人入乱れての世話だまりになる。政五郎の腰の煙草入が落ちたのを、祐天が拾って花道へかけ抜ける。舞台は三人で引っぱりになり、山おろし烈しく幕になった。

□劇中劇＝（吃又）

幕を引つけると花道へ、見物客の男女と茶屋の男が出て、吃又の秀調と段四郎の噂をして、幕合が長いから、お茶屋へ行って休もう、といいながら向うへはいる。直ぐ幕があく。

□返し 河原崎座楽屋の場

上下、楽屋暖簾の裏を見せて、板羽目、横長の囲炉裡口には茶釜が懸って居る。上手正面には刀掛けがあって、鼓、太鼓などが乱雑に、ガヤガヤと言い争う声と共に、上手の暖簾口から左喜之助の下方望月太文次、あとから荒次郎の六郷新三郎、太文次は撥を持ち、新三郎は笛を振上げて争いながら留めの男と大勢と共に出来た。

「何の遺恨があつて中あげに恥をかかせなはつた。さアそれ聞かん中は、ワシ、承知しまへんぜ——」

「何を言やアがるんだ。自分達が不器用だからしゃぎりと笛と合わねえんだ、贅六め」

太文次は遠国者故馬鹿にすると口惜しがる。新三郎は唯の囃子方とは訳がちがうんだと威張り散らして、柿色の肩衣を引っかけた稲荷の頭（米左衛門）を笛で殴って天窓へ瘤をこしらえる。女形の瀬川栞吉（左八助）は鼻を打たれて血だらけになって泣き出した。

三升の留場、寿の福松が紫地へ白く鎌わぬを染出した派手な拵えで来て留めると又たこれが喧嘩になって騒ぎは更に大きくなる。頭取が無理に福松を上手へ連れて行く。そこへ出来たのは寿美蔵の遠山金四郎、藍、紺の細かい弁慶の着流し、紺猷の帯をキリッと美しい男前である。

「さア俺が留めても了簡しねえか、了簡出来ざア、相手になってやろう」

と、片袖を脱ぐと、一ぱいの文身が鮮やかに見えた。相手は旗本の金四郎。双方ともこれには凹んだ。

「そんな満らねえ喧嘩なら、此場はこれ限り水に流して、俺に任して呉んねえか」

と、金四郎は喧嘩を預り、何れもピョコピョコお辞儀をする。遠くの方から見物の娘、茶屋の者などやっと安心したという風ではいつて行く。頭取が来て礼をいうと、遠山は「座頭の成田屋さんへよろしく」という。恰ど迎いの若党が出来たという知らせに、遠山は「おい楽屋、仲間の仲直りで尾張町の北川へ寄つて帰るから先へ帰れといつてくん」と命じて、更に、

「おい弥市！ 羽織と脇差を取て呉んな」

と小紋の紋付を引っ掛け刀をさす。通り神楽の鳴物で——幕になった。

□三幕目 愛宕下遠山邸の場

正面玄関式台、白地中形の襖。左右海鼠棧の杉戸。上下になって用人紅若の川村伝吾と若党、仲間立かかって、殿様の居所が知れぬのは困つたもの、箕浦も今朝から捜しに出て居るといふような話をして居ると、門番が駈けて来て、今殿様がお帰りになつたと知らせる。

置上るりがあつて合方になり向うから[○]壽[○]美[○]蔵の遠山、前幕のいきな拵らえで、[○]長[○]十[○]郎の若徒箕浦肩へ手をかけて出る。甚く酔つて居る様子だが、花道へ止って若党に世話を焼かせながら玄関へ来る。一同出迎えると、よろよると式台へかかって「只今御帰りだ」と怒鳴りながら雪駄を脱いだ。

奥から[○]筵[○]升の弟清之丞が出て「今宵は父上の三回忌ゆえ、母上も姉上もお待兼」というので金四郎は、「今日は必と帰って参るものを、在所を捜す無駄な手数——」といいながらそこへ仆れて寝ようとする。弟は驚いていろいろと言いながら漸く奥へ連れて行く。後、箕浦、用人など殿の大酒の噂とりどり。知らせで道具が廻ると、同邸奥仏間になる。

真中に金四郎は長くなって、上手傍に弟が控えて居る。上るりになって下手杉戸から[○]秀[○]調の奥方おけい。美しい丸鬘、裾を引いた着付。塗盆に紫金錠と水を持って出る。母上に知れぬ中起して酔を醒させねばと、

「揺起されてようようと、眼は覚れども酒の酔、醒むるようすは更らに無く……」
「うるさい」と言つて又寝るのである。弟はッと寄つて兄を引起し事をわけて意見をす。ゲーイとおくびをして「ゆるせゆるせ」と又寝て了う。弟は呆れ且つ勃つとした。「もう兄上とて許るされぬわい」と屹となつて立ちかかる時、奥の襖を開けて[○]小[○]団[○]次の後室切髪、被布姿に白木の小箱を持出でて「愛想が尽きた、もう構わずと捨て置け」と上手に座を占め、金四郎を引起した。又うるさいという顔付で目を開いた遠山は、母が居るのでさすがに驚いて起直つた。

「これは母上御免下され——何でこれへ父上の遺言状などをお出しなされました」

「論語読の論語知らず、人倫の道を忘れしか」

「これは母上改まって……^たと^え板令酪酩致しても……」

「あのこな不孝ものめが……」

と筵のはいった合方となつて、母親は、

「母ばかりと侮つて、町家へ出ては下賤に交り、あろう事かあるまい事か、両の腕にほりものまで……」

と金四郎の左手の袖を捲り上げて泪ながらに強意見、勘当を願ひましようかというので母は怒つて、彼の小箱を取つて振上げ、妻も見兼て傍へ寄り涙と共に酔をさませと掻口説いた。

金四郎は居住居を直し、「母上にはそれほどまでに放蕩無頼と思召すか」と屹といい母を上座に畏まつた。

「凡そ天下の役人たるもの、下民の情に疎くして、その政道の行届かぬは、公儀へ、対して不忠故、未だ無役を幸いに、下民の情に通じ置かんとほりものせしも下々に心を許さず所存にて、盛り場又は芝居へ入込み、悪人の境界会得せしが、決して放蕩懶惰に流れ、乱暴なぞは致しませぬ」

と、母の尚おも疑うのに対し、河原崎座の座付には岡安喜代七、杵屋桑吉など身分あるもので、御囃子とかいう位と話し「今日父の三回忌、此の^たい^や連夜限り足踏いたさぬ決心故、

必らずお案じ下さるな」とその本心を打明けた。母親、奥方、清之丞顔見合わせて喜んだ。父上へお詫びを——と含嗽手水をして、一同上仏壇の前へ坐って焼香する。

と、賑やかな舞の鳴物になって下手杉戸をがらりと開けて、^{ひら}庭八の御茶道が踊りながら出て来て、

「御恐悦々々」と騒ぎ立てた。仔細を聞くと、今日御城で金四郎様御呼出の旨を承ったので飛で参りました。という中に、若党が状函を持参した。遠山は之を披いて読下した。

御用の儀有之候間、服紗小袖、麻上下着用、明十一日五半時御城へ罷出らるべく候とある。母親はじめ「五半時とあれば悦び事。折も折とて御速夜に、思い寄らざる御登用」坊主は「いよいよもって御恐悦」と頭を下げて、下座の鳴物に連れて立上り、扇を開いて踊りまわる中に——幕——。

□四幕目 花川戸須崎内の場

序幕の稽古所を政五郎の出張所に直したという舞台。長十郎、^{こぶん}榮升の乾児二人が柳行李や風呂敷包を出し居る所へ、^{おえん}庭鶯のおえんが尋ねて来て「親分が久振りでお帰りと聞いたからお目にかかりに来ました」と上る。奥から^{政五郎}段四郎の政五郎、^{あらい}荒い糸織の広袖纏天を着て出て来た。

「恰ど足掛三年振、お若があんな事をしやアがったので、面目無くって出て来るのが億劫になったのよ」

と話して居る所へ、向うから^{祐天}寿美蔵の祐天、^{糸立}脚絆草鞋穿きに糸立を引かけて出て来た。

案内が横柄だといって乾児が追かえそうとするのを政五郎が叱って呼込むと、それは昔の尾花屋の小三郎であった。挨拶も風体も非常な変りようである。政五郎は少しグツとした心で身を投げたと聞いたが「月は違うが今日は八日、幽霊だな、幽霊で無けりやアのめめ茲へは来られぬ筈だ」と厭味な台詞。祐天は落着払って坐り込んだ。

「高い敷居をのめめと上りましたは余の儀でなく、お目にかけてたい品があつて……」

「ふーむ」

と政五郎の不審がるを横眼に見て、祐天は懐中から取出したのは、前幕成田で拾った大きな煙草入であった。

「こりやア親方のでございましょうね」

「おお、どうしてこれを？」

「拾ったのさア」

「ええ」

二人は屹と気味合い、合方になる。

「三年あとの縁切に、こなたの詞を反古にしてお若と二人三囲りからどんぶりやったが死損ない柳畑で引上げられ、のめめ家へ帰れもせず、知る辺を頼って下総へ、成田近所をごろつく中、背中に彫った不動から、祐天小僧と綽名に呼ばれ……」

と護摩木山の出会を話し「もし親方、どうぞ器用に買って下せえ」と煙草を輪に吹いた。傍に聴いて居たおえんは呆れる。政五郎は漸く想出した。

「恰どお山の夜参りで、しかも十月十日の晩、葉越の月の薄くらがり、顔は知れねど突当り、喧嘩仕かけて争う中、思わず落した煙草入、買えというのは妙な訳」

祐天は当夜の政五郎を怪しといて、強請ゆすりに来たのであった。言い争って居る処へ、奥から米左衛門いひざゑもんの老人が出て来た。それは当夜三人に殴られた夜番であった。夜番がいろいろ祐天を言詰いひなぢって居ると、政五郎は思案をきめて菖蒲皮の財布から二十五両包を出して「之で黙って帰って下さい」という「や、こりゃ切餅」と祐天が驚くのに冠せて「少なからうが、それを路用に、早く成田へお帰りなせえ——意見はしねえが親御さんが一粒物の大事な息子、とっくり胸に手を置いて、悪い心の血を吐出し、親に安心させた方が…」としんみりと言って聞かせた。

祐天は胸に応えたようす「顔役手合でえいの多い浅草、恥をかかねえうちの中に、臆やがて後日に親分にも、好い耳を聞かせましょうよ」と金を財布に入れて脚絆を脱ぎ、一同が驚いて居る中に「そんなら親分」「小三郎さん」「大きに……」と門へ出た祐天は、付け際へ来て顧返り「俺より上手の政五郎、後日の顔を立てにゃアならねえ」と心に點頭うなずいて頬冠りをして急ぎ足で向へとはいった。

乾児こぶん共は湯へ行こうと、夜番おやじの爺とおえんを連立おんたてって出て行った。政五郎はあと一人になりて神棚に礼拝などして居ると、向うから猿さる之助の按摩電庵、

「杖を力に世を送る片手かたて葉わぎなる占いも——」

と上りりになりて「御おん判断」と呼びながら出て来た。これは角太夫の変相したのである。

「ああ、肩が張ってならねえ所へ恰ど按摩は有難え」と政五郎は直ぐに呼び込んだ。羽織を脱いで後ろへ廻り、上の方を揉み始め、いろいろと世間話、新潟の女の話などをして居る所へ、団子だんごの尾花屋おななの小僧が詭ごうの道中どうちゆう差さしを持って来た。政五郎が娘の一件から御無沙汰になってるといふと、小僧は私もあれ以来、「手は下ろさねど主殺しゆうし、好くのめめと居られるなど、今日も今日とて番頭さんに折檻され、辛いから死にたくなつた」と泣いて話した。政五郎は辛抱しろと説き諭さとし、小僧もわかりましたとおとなしく帰って行った。

按摩はどこどこの小僧さんだと聞き、政五郎が山の宿しゆくの尾花屋という刀屋で、裕福だから息子も番頭も碌でなしで困ると話す。「へえ、物持ものもちで」と電庵は根ほり葉ほり聞く様子。「お得意にしようと思ひまして」「いや、抜目がねえな」と冗談になり、按摩が汗を拭くのに手拭を忘れて困って居るので、政五郎は端の方が裂けてるが、これを使いねえ」と出してやった。これは三社様の祭りの揃い手拭である。

又た療治にかかつて居ると、向うから紅若かどつげの門付が手拭を吉原冠りにして義太夫の流しの拵かどつげ、軒下にしゃがんで『袖萩』を語り始めた。内の二人は却々なかなか巧いと噂をしながら聴いて居たが、政五郎は小銭を持って門口へ出て渡そうとして見合わす顔。

「や、お前はおもとさんじゃアねえか」

延若の母親であった。恥かしがって逃出すやつを無理に引上げ、門付になった仔細を聞いて居る中に、電庵ははっと気付いて横向きに顔をそむけた。おもとはこの按摩角太夫の置去りにした女房である。

おもとは角太夫の不実を恨んで涙片手に愚痴を並べた。いろいろと慰めて居た政五郎は「恰ど好いから内へ留守居に来てくれ」と遠慮するのを無理に納得させる。電庵は段々疎んで小さくなる。「さア按摩さん待遠だったの、やってくんねえ」と元の座に坐ると按摩はもじもじと横向きになって揉み始めた。おもとは帰りがけにチラと電庵の顔を見て、ハッと驚いて外へ出て、何か思案を定めて、急ぎ足に三味線を抱いて向うへはいった。

電庵はほッと息を吐いた。政五郎はおもとに就て娘の心中話や何かをして「その事に就き、今年の春、遠山様の組子の衆の耳になり、目を付けて居るといふから、何か事が起るかも知れねえ」と物語るの、電庵は底気味悪くなって、そこそこに療治を了った。

多分の療治代を待たせたからといって貰い、羽織を着て小風呂敷を持って電庵は木戸の方へ「お手拭を難有うござります」といいながら戸外へ来た。花道へかかって両手を上げて伸びをする時、カッと両眼を開いたが直ぐに気がついてつぶり、按摩笛を吹いて向うへはいった。

又一人になった政五郎は、以前の脇差を抜いて行燈の灯に翳し「仕上げをしたら器量が上った」という時、寄席の打出しの鳴物になる。「もうはねか、夫じゃア今夜も」と刀を鞘へ、柝がはいって「四ツだと見える」とその鳴物で幕。

□同 山の宿尾花屋の場

上手寄り普請中の土蔵足場。雨避けの苫がかけてある。忍び返し付の黒板塀、見越の松が見える。向うから猿之助の電庵が出て来る。あとからつけて来た紅君のおもと。そっと下手の天水桶の蔭へかくれた。薄目を明いた電庵はそこから見廻して懐中の風呂敷包から先の短銃を取出した。忍び込む仕度らしい。

おもとが窺い寄って「これ、こちらの人」と獅噛付いた。ハッと盲になって「ど、ど、どなたでござります」と白ぼくれる。おもとは召連れ訴えをすると、騒ぎ立てるので、ええ面倒と上手へ突飛ばして、又た駈寄るやつを下駄の尻脾腹を蹴上げた。ウーンと仆れたやつを前幕の手拭で咽喉をメめた。

コーン、と本釣。クルリと尻を捲って両眼を活と見開いた。死骸を足場の下へ引ずり込んで、足場の苫をめくってその上へかけた。杖の頭を引き抜くとギラリと四寸ばかりの槍の身が光った。抜いた頭を用水桶の下へ先ず埋めた。四辺を見廻した電庵は、下手寄りの板塀の押縁を件の槍の身で二三枚剥がした。板も外れた。忍び込もうと覗くと、中から人間が這い出した。驚いて天水桶の蔭へ隠れた。

這い出したやつは荒次郎の番頭清六であった。寝巻姿で風呂敷包を抱えて居る。――月が出た。番頭は「塀のはがれて居たのは天の助け」と言いながら、風呂敷を拡げて着物を着替え、下駄を穿いて、久喜万字の若紫から来たという文を月明りで見ると北叟笑んだ。衣紋を直して「いや待てよ」と懐中のくすねた金を調べようとしてバツタリそこへ取落し

た。月が隠れた。用水の蔭から電庵が杖の先でその金を引寄せた。上手土蔵の足場の上へ、此時祐天が出てこの様子をじいっと見て居た。

番頭は灯を取りに又た堀の内へ這込んだ。電庵が出てニツタリする時「おい、兄い。好い手際だのう」と足場の上から祐天が声をかけて、ヒラリト下へ飛び下りた。「成田の山で別れた限り、恰ど三年振だのう」という。電庵が「仕事をしたのか」と訊くので「なァに此処は俺の家だが、忍び込んでお阿母に逢い、以前の謝罪を仕ようと思って居た処だ」と答える、

電庵はきざな事を聞いたから「遠ッ走りの路用を擧げ中だ」といい、名奉行の遠山の手で尋ねて居ることを話し出した時、番頭が網雪灯を下げて穴から出て来た。祐天は明りを叩き落して電庵は引倒して縛り上げ猿轡を嵌めて風呂敷を引冠せて、足場の根へ縛りつけた。

電庵は新潟の方へ行くといい、祐天もそれじゃア早く江戸を立とう、と家の方へ心を残して——新内の下座で祐天は向うへはいった。又た月が出た。堀へ身体を寄せかけて居る処へ上手から左升の目吉という手先、頬冠りの着流し、遊び人の拵えで出て、ちょっと透してツカツカと、

「御用だッ」

と組付いた。突放した電庵は、早速に槍の穂を抜いて用水桶の中へ入れた。振払って下手へ行きかけると、又た二人の手先が現われた。「御用だ御用だ」面白い、そして烈しい立廻りが始まった。月が又た隠れるので闇探りになった。立廻りの中に空へ向けてズドンと一発放った。三人の手先はハッと地に這った。やがて二発目を放って下手へすり抜ける。引戻す、振放す。その時縛られた帯がほどけて、風呂敷を冠った俣立上った番頭が震えながら之へ搦んで、不思議な滑稽な暗闘となった。

やがて電庵は手先の仮声などを使って花道へのがれた。一人の手先がこれを追った。舞台は番頭を押えた二人が向うを透す中に、幕が引かれて、賑やかな合方になり、花道で更に組んずほぐれつの大格闘を続け、放れて二人は揚幕へ駆け込んだ。

□同返し 牛込自身番調の場

平舞台、中窓があつて、総て板羽目、下手玄関、天水桶、手桶などがある。上手羽目の隅に荒次郎の番頭が手錠、腰縄で俯伏して居る。左升彦八外一人の手先が居る。式台の方で四人ばかり調べられて居たが放還されて行く。

向うから寿三郎の同心藤村浦太紋付羽織、大小、紺足袋、雪踏穿きという、御用箱を背負った供を連れて出る。「御出役だ」と直ぐ奥へ通って真中に坐り、御用箱を明けて書類を出し、直ぐ番頭の調べにかかった。手錠を外し、前の方へ引出された番頭。おどおどして返答も要領を得ない。下女との馴れ染から掛先を胡麻化したこと、稽古の師匠が今、吉原で若紫と名乗って居る事などベソを掻きながら残らず白状する。

今日はこれだけだ、と又た手錠を嵌められて、下手から高手籠手に縛られた電庵と入れ違いに外へ引かれて行く。電庵の調べになる。型の如く出生地姓名から始まったのだが、

藤村は按摩の顔をジッと見て不審という心、昨年から眼が潰れたと聞いて藤村はほッと息を吐いた。尾花屋裏手の事件の訊問に入ると、電庵は作り声をして飽く迄総てを否認するのである。全く夢のようでございますなどという。窓の外には一ぱいの人集りである。

仕込杖の事、鉄砲の事。証拠物件を持出して手先等が責め問うのに対して電庵は、「あの鉄砲にはびっくり致しました。あんな驚いた事はございませぬ。盲が覗いをつけるものを……ああ情けない……」

強情な奴、痛い目をさせるぞ、と手先は寄て細引を以て海老なりに手から縛り上げて、鞭のようなもので、背中を打ち始めた。悲鳴を上げた電庵は「申し上げます申し上げます」と叫んだ。そして「御ゆるめなすって……」と神妙らしい。腰縄だけにして茶碗の水など与えられた。俯伏いてやや少時く息をして居た電庵は、やがて顔を上げて両眼を活と開いた。

「やい天学。よくも洒ア洒アとして責めやがったな」

「や、偽盲で居やアがったな」

「知れたこった。おい——」

と、手先を見廻して、「此奴はやっぱり盗人だぜ」と大声でいい「そればかりじゃアねえ、俺と一緒に下総で、此奴ア牢を破った奴だ」と毒付いた。藤村の天学が呆気にとられて居る処へ、群衆に交って居た同心が外の手先と共にすばすばすばと飛込んで藤村に組付いた。電庵は腰縄の俣で混乱の立廻りの中を、見切の窓の棧を破って逃出した。左升の目吉が続いて追かけた。折重なって藤村の天学に縄をかけた。鉄棒の音が聞こえて——幕。

□大詰 北町奉行白洲の場

時の太鼓で幕が開いた。正面三段の高二重本縁付。目隙き障子、目安方が二人左右に控える。

警蹕の声で寿美蔵の遠山左衛門。黒の肩衣一本差、扇子を構えて着坐する。下手から寿三郎の天学が呼出されて白洲の席の上へ坐る。籠手を緩めた腰縄である。

「無実の難にて斯くまでに牢舎の苦痛を致すとは……」と天学は思わず力を籠めて言った。更らに角太夫等に遺恨を返すには天下の役人となる外なしと、其道の学問修行を致し、同心の譲り株を買ったと述べ、その修業中の費用は、角太夫が娘を人買いに売った金の半ばを遣ったのだと申上げた。

遠山は吉原江戸町一丁目、家持藤吉抱え遊女若紫——を呼出した。上手から松蔦の花魁。道中姿きらびやかに、やり手が付添って出て来て「や、こなたは」「ほんにお前は」と天学と見合って驚いた。遠山は下総で売られた時「実父角太夫並びに此者であったかどうか」と言われ「あい、そうざんす」と答えて思わず奉行を見上げてハッと又もや若紫は驚いた。

若紫が心中の助けられた事から船橋へ売られた事を述べ「よくも妾を欺しなしたね」というので、天学は「全く済まぬ事をしたが、向島で腰帯と履物を残して置いたか」と確

め「よくよく宿世の因縁だ、角太夫の実子が残した二品から八州の手にかかった」と述懐し、更らに、「これも則ち宗祖の御罰」とグツタリなった。

遠山は天学に向って、「其方は上役人に遺恨があろう」と星をさして理非を説き、下情に通じた某は疾くより汝の罪悪を見極め置いたとい腕を捲て文身を見せ「男らしく申して了えよ」と砕けた世話の調子で言った。天学はハッと頭を下げて「実は恨みある役人共を一刀に切捨てて、刑罪受んと決心した」と自白に及び「御法通りの御仕置を仰付下さりませ」と服罪した。

遠山は、「牢拔の刑は重罪にて、又勾引に組せしものは重追放に行えば軽からざる大罪人」と重くいい「併し」と詞を和げて「其筋の手落もあれば、再調せざれば裁許し難し」といい、又屹となって「全く免れぬは出家の身として遊里に通いし女犯の罪、さすれば日本橋にて三日晒の上本寺触頭へ引渡す」と宣告し、更らに「寛大の御沙汰相待ち居れよ」と砕けて言った。天学は忝なさの頭を下げた。此時同心が出て「天学の身代りにと、尾花屋の倅小三郎というもの訴出でました」と申上げると、言下に「取上る事罷りならぬ」と屹度いい、天学は引れて次へ下げられた。

最前から凝と遠山を見上げて居た若紫は、此時「もし金はん。大層出世をしなましたねえ。おくらどん見なんし」という。やり手も其出世に驚いて居る。片頬に笑を見せた遠山は、

「若紫、おくら、まだ苦界をのがれぬか。予は三奉行の一人と相成ったぞ。もう好い加減に堅気にならんか」

といい、続いて「公儀評定所で芝居は無益という議論が出たとき、予は無学の目学問、勸善懲悪を教えるに最も必要のものなれば、取払うは不同意と申し張った。遊廓もまっその如く——只だ心得違いを致すなよ」などと話し出した。やり手は「おやおや、無駄なものではござりませんかねえ」という。

若紫が母の事を言い出して嘆くので、遠山は山の宿で一旦殺されたが町方出先が介抱して蘇生させた、今日改めて下渡すから、久振にて名乗りを致せ——といい、是にて一件落着せり、兩人ともに立ませいと詞を改めて立上る。若紫は裏向きになって手を合せる。時の太鼓で幕。

□同返し 新潟行形亭の場

太鼓入り新潟甚句で幕が開く。上手庭へ階段をつけた中二階の座敷、それから下手一ぱいに橋が懸って提灯を吊し花やかな料理店の離れ。長十郎、鳶之助、笑猿次、寿太郎の町人、踊りを見ようと噂をして居ると猿之助の角太夫は奥州屋善兵衛と偽名して商人風になり澄してそこへ来る。新潟芸者左喜之助、莖鳶、栄升、団次郎、鳶丸などぞろぞろと出てあれあれ踊りがこちらへ来ると下手を見ると、下手から米三の婆芸者を心に美しい半玉を交せて十数人が踊りながら庭へ出て来た。

例の樽叩きで名物おけさ踊りが賑やかに始まると、やがて二階の奥州屋始め皆々羽織をぬいで其の踊の輪へはいつてぐるぐる廻る。と彼の四人は何れも実は手先で、互いに目く

ばせをして用意にかかる。芸妓ども段々に二階へ流れて、橋の上で踊りの輪を作って居る。突如、

「御用だッ」という声と共に庭先では烈しい格闘が始まった。角太夫は七首を抜き放って荒れ廻った。踊りの連中はワッと何れも下手へ逃込む、あと橋の上で一しきりの格闘。早縄が手首へかかった。やがて善兵衛実は角太夫は縛に就いた。——（四月六日見物）